論説

椎葉山―考古学的に調査した戦場の一例―

高橋信武

はじめに

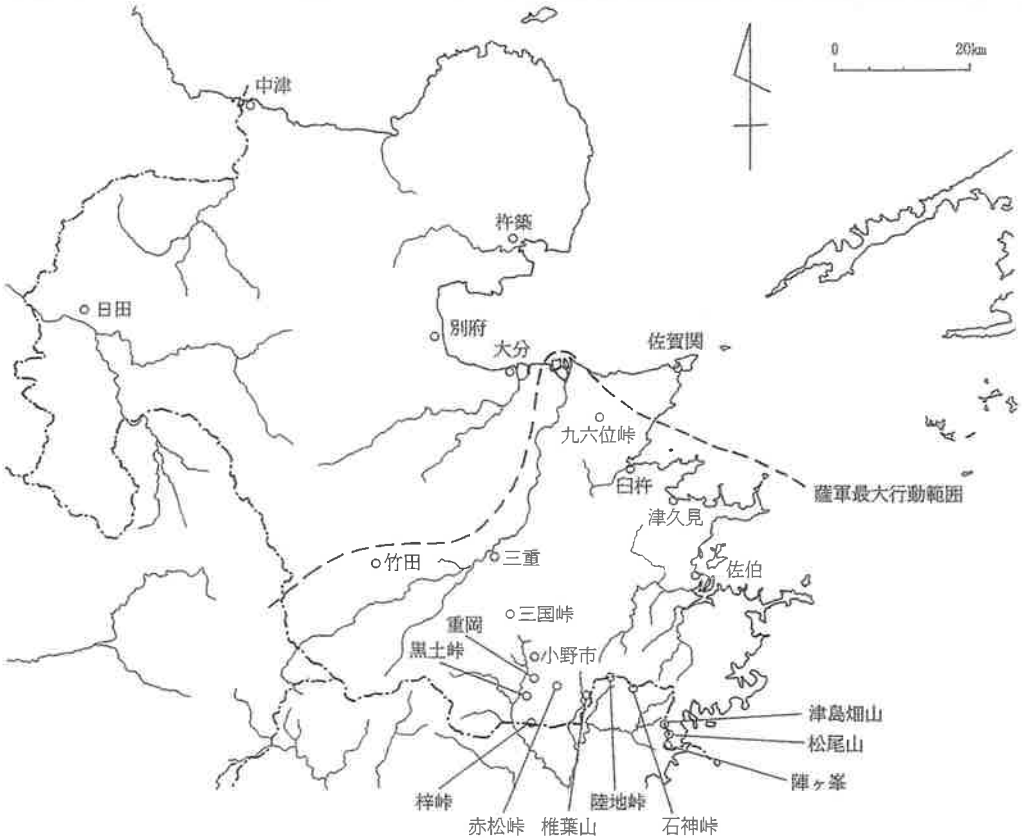
一八七七（明治十）年の西南戦争で敗退を重ね、熊本、人吉、宮崎、延岡と本営を移動してきた薩軍は八月、宮崎県北端にある可愛嶽の麓長井村に取り囲まれて大部分はここで降伏した。西郷隆盛は解散令を出した後、宿舎にしていた俵野の児玉熊四郎宅の裏で陸軍大将の軍服を焼かせた。俵野の立山八五郎という農民は兵士が西郷の軍服を焼いているのを目撃している。その後、西郷隆盛等数百人は政府軍が総攻撃を予定していた前夜、可愛嶽に抜け出て、政府軍を翻弄しつ九州山地を経て鹿児島に向かい、戦争は九月二十四日に鹿児島市城山で終結した。翌年のある日、例の立山八五郎は可愛嶽の南にある洞窟で薩軍の行李一個を発見した。それから数十年がたつうちに中身は紛失したり汚損したりして残り少なくなっていった。約五十年を経過した一九三一（昭和六）年、県北視察の途中の県知事有吉実がこの資料を実見しその重要性を認め、当時残存していた資料五冊について写本を作成させたため、今日、その内容が伝わることとなった。「明治十年役薩軍資料」がこれである。現在、「鹿児島県史料　西南戦争第三巻」（一九八〇）に収められている。現物の第五分冊はその後行方不明となった。西南戦争で敗者となった薩軍側は部隊の公式記録を処分したため、これが唯一の薩軍の部隊記録となっている。のみならずその部隊が五月から八月まで大分方面の戦闘に従事したため、記載内容は大分県に関する部分が多い点は本県にとって貴重な記録として今後活用されることが期待できるのである。

大分県教育委員会は昨年度、国庫補助事業大分県内遺跡発掘調査の一環として西南戦争戦跡の分布調査を始めた。その中で佐伯市宇目大字大原所在の椎葉山において測量調査を実施するとともに遺物の回収を行った。椎葉山は薩軍が守備し、政府軍が攻撃をしかけて手痛い反撃を喰らった場所である。政府軍側の記録が残っているのは勿論、薩軍側も「明治十年薩軍資料」に詳細な記録が揃っているという珍しい例である。調査結果は「大分県内遺跡発掘調査概報告八」(二〇〇五大分県埋蔵文化財センター)として発行しているが、主に公的機関に配布しており埋蔵文化財関係者以外には目に触れにくい状況であるため、あらためて本誌の場を借りて山間部における戦闘の具体例として、椎葉山にまつわる資料・調査について紹介したい。

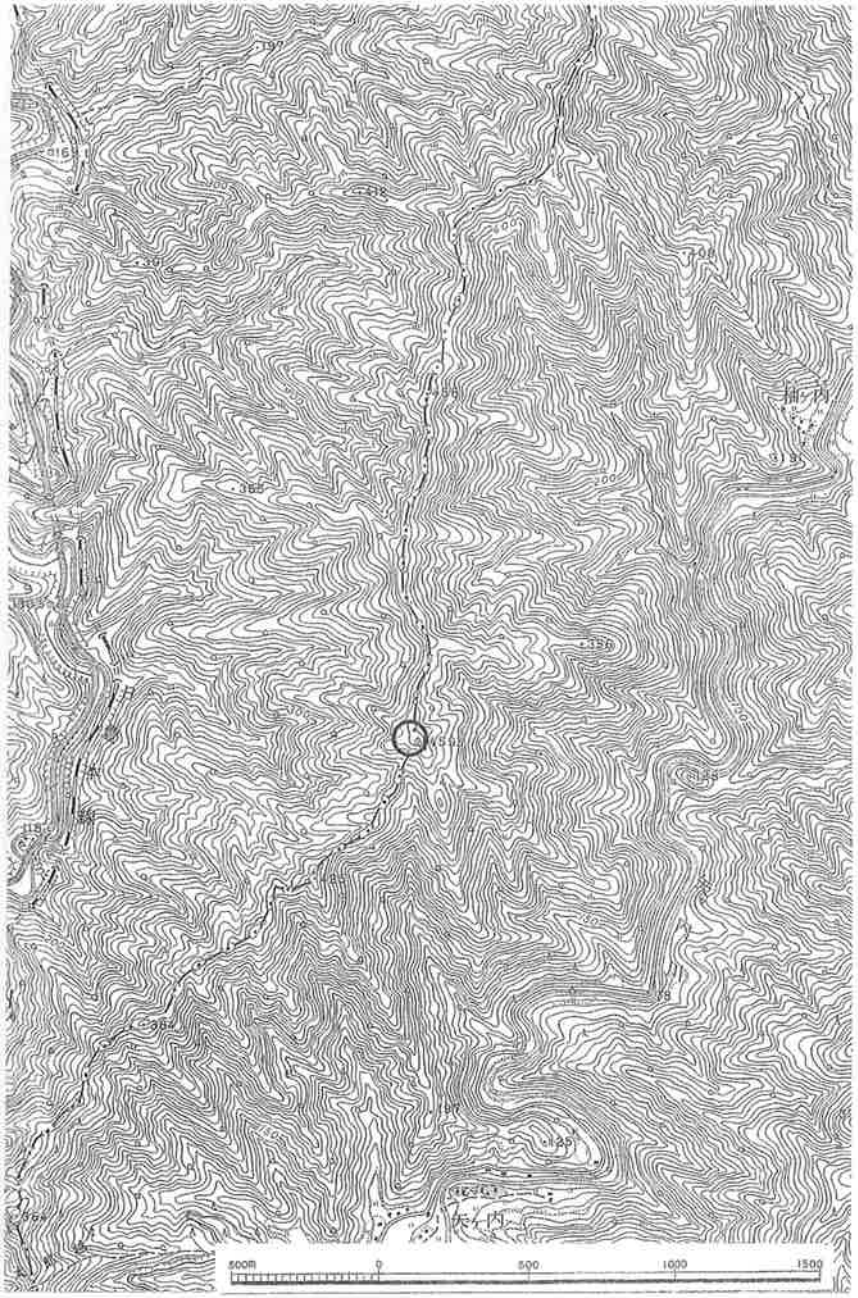
椎葉山の調査

椎葉山はどこにある？　三年前のことであるが、宗太郎で西南戦争のことを聞取り調査したときに官軍の一個小隊が全滅した山があるという話を聞いた。それは宗太郎駅から北に五個目と六個目のトンネルの東側の山であるという。話してくれたのは当時百歳の河野喜三郎さんであった。生まれる二十数年前の出来事だが、この村の人にとっては特異な事件として話題に上っていたのであろう。戦記によればこの県境尾根線で政府軍が全滅といわれるほどの被害を出したのは蛇葛山と呼ばれたり、椎葉山と呼ばれた山における八月六日の戦いしかない。薩軍が守備している所を政府軍が攻撃し、失敗するという戦闘だった。地図を見ると条件にあった位置には周辺より一段高い山がある。二〇〇三年に踏査したところ頂上付近で五基の台場を発見した(「西南戦争之記録」第二号二〇〇三)。この山の頂上には三角点がある、この山名が椎葉山であることは地図には載ってないがその後国土地理院の三角点の所在地名を調べて再確認できた。

大分県南部の県境地帯は一八七七年六月から八月まで戦場になった。佐伯市宗太郎付近から大原までの大分・宮崎県境はほとんど一直線に八キロ南北に続き、さらに東側に屈折して豊後水道に向かう尾根線であり、西南戦争当時作られた多数の台場跡が存在する(「西南戦争之記録」第一号・第二号・「大分県内遺跡発掘調査概報告八」)。「明治十年役薩軍資料」を記したの


0
20km
中津
杵築
日田
別府
大分
佐賀関
九六位峠
臼杵
薩軍最大行動範囲
津久見
佐伯
竹田
三重
三国峠
重岡
黒土峠
小野市
津島畑山
松尾山
陣ヶ峯
梓峠
赤松峠
椎葉山
陸地峠
石神峠

椎葉山の位置図



椎葉山遺跡位置図（1/25,000 重岡）

はこの尾根線の一部を守備した薩軍部隊であった。

この付近の県境尾根線の南端には観音山（標高五八三m）があり、その北側に大分県側の宗太郎と宮崎県側の松葉を結ぶ宗太郎越（標高二八〇m）という峠がある。峠の北側にはエゴオノ山（標高三六〇m）がありさらに尾根を北に行くと椎葉山（標高四五九m）となる。「明治十年役薩軍資料」に登場するのが椎葉山における戦闘である。二キロほど北に行くと宮崎県の柚ケ内から県境尾根に上って尾根線に合流し北上する大原越という旧道がある。勿論自動車による通行なぞは不可能である。南北に走った県境尾根が佐伯の方に東に屈折する地点で大原越は逆に西北に下ってゆく。屈折点で東に進むと旗山・中の峯（標高五四八m）・額返し・天狗嶺という戦記に出てくる峯が続きその向こうに陸地峠がある。ここ数年の踏査で現在確認済みの台場は観音山に五十基、宗太郎越から椎葉山の手前までに二十九基、椎葉山に五基、椎葉山の北側には台場のない空白地帯が一キロほど存在し、その北側の県境尾根に二十五基、県境の屈折点から陸地峠中央までに五十五基がある。

昨年度、より詳しい記録を残そうと前述のように測量調査を行った。この山の頂上からは北西、西南西（台場の並ぶ尾根）、東南の三方向に尾根線が延びているが、三角点から南は尾根線が県境になっておらず、県境は椎葉山の三角点から南南西方向の広い急斜面に引かれているようである。頂上から数十m下がった位置に始まる尾根が県境である。頂上から西南西に延びた尾根にだけ五基の台場跡がある。椎葉山より北には一キロほどの間は台場が存在しない。反対に、頂上から数十m下がった位置に始まる県境尾根では台場が南方に向かって分布している。

遺構の状態

椎葉山における台場の状態と遺物の出土状況は次のとおりであった。台場一は椎葉山の頂上を占め、半円形の土塁部分が北側を向いている。土塁部分の規模は東西十m、断面の幅は二、五m前後、北部での高さは一m弱である。内側は東から中央部分を掘り残して、他の部分を掘り下げて作った平坦面がめぐる。中央に三角点がある。内部の平坦面が背後の長く続く点は特

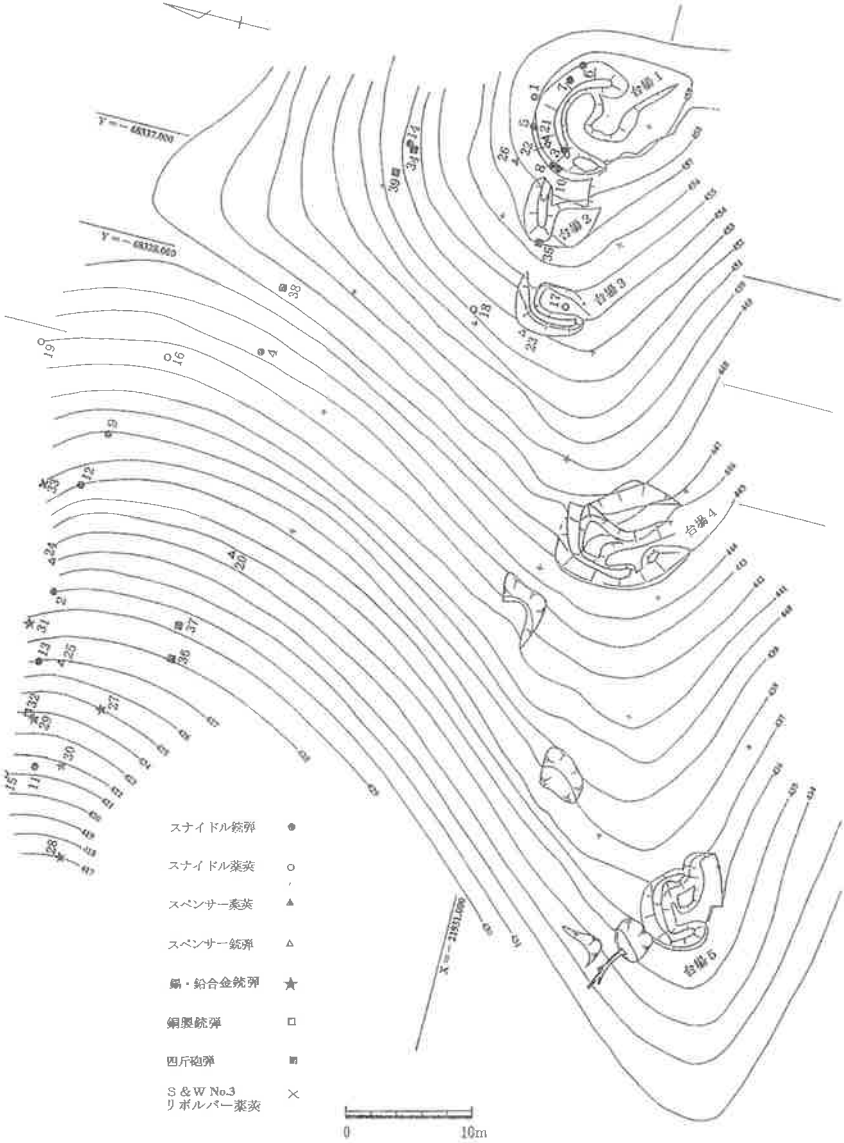
徴的である。北面する土塁部分外面でスナイドル銃弾七点、スペンサー銃弾二点（一点は以前採集したもの）を発見した。台場一の西側一ｍに直線的な土塁部をもちその南側に平坦面を削りだしているのが台場二である。土塁部分の先端に四斤砲弾片が埋まっていた。三号は標高差で三ｍ下、距離で二、六ｍ西側にあり、台場二の土塁部の延長上に土塁部を作っている。尾根の中軸をはずした場所に設置されている。掘り込まれた内側でスナイドル銃の薬莢一点を発見した。台場四は台場三の標高差で六ｍ下、平面距離で十二、八ｍの尾根中軸上にあり、半円形の土塁部が尾根の下方と北側の谷を向いて作られている。内側は三段に分かれている。台場五は台場四の二十二ｍ西側に位置し、標高では八ｍ下になる。台場一を小型化したような形で、土塁部分の幅は六、三ｍで、東西方向の長さは八、七ｍである。北斜面には最近の風倒木や古い風倒木痕が並んでいる。

頂上の台場一から最下部の台場五までの標高差は二十三ｍあり、両端の水平距離は七十三ｍである。台場一から台場三は土塁部が一直線に並び相互に近接している点などから全体で一つのような連続性が認められる。

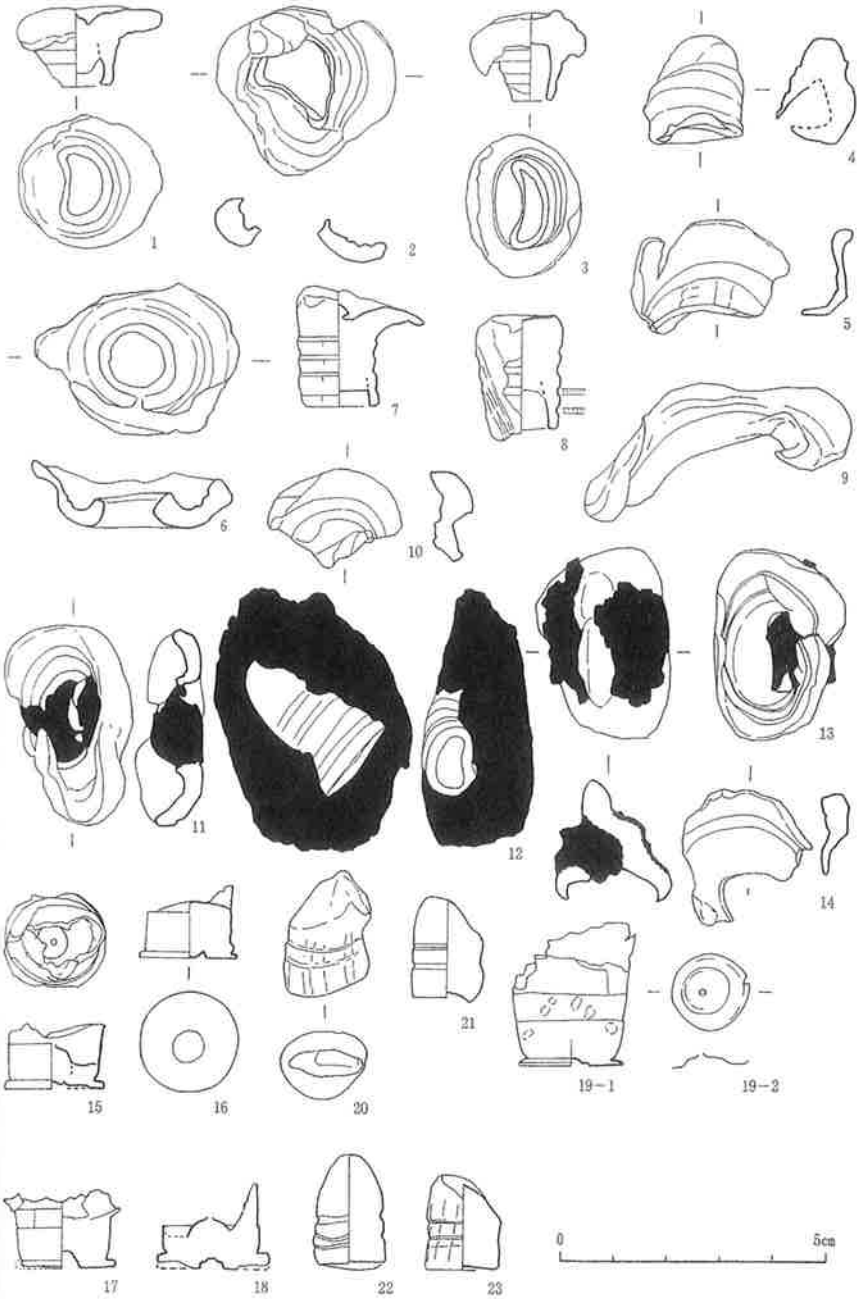
遺物の分布状態

椎葉山では以前に西南戦争を記録する会による最初の踏査時に、台場一の土塁部外側でスペンサー銃弾一点が採集されている（「西南戦争之記録」第一号二〇〇〇）。今回の調査では金属探知機を使って遺物を探した結果、銃弾二十六点・薬莢七点・砲弾片六点を発見した。遺物の分布状態は測量図のとおりだが、範囲を広げればもっと発見できたはずである。

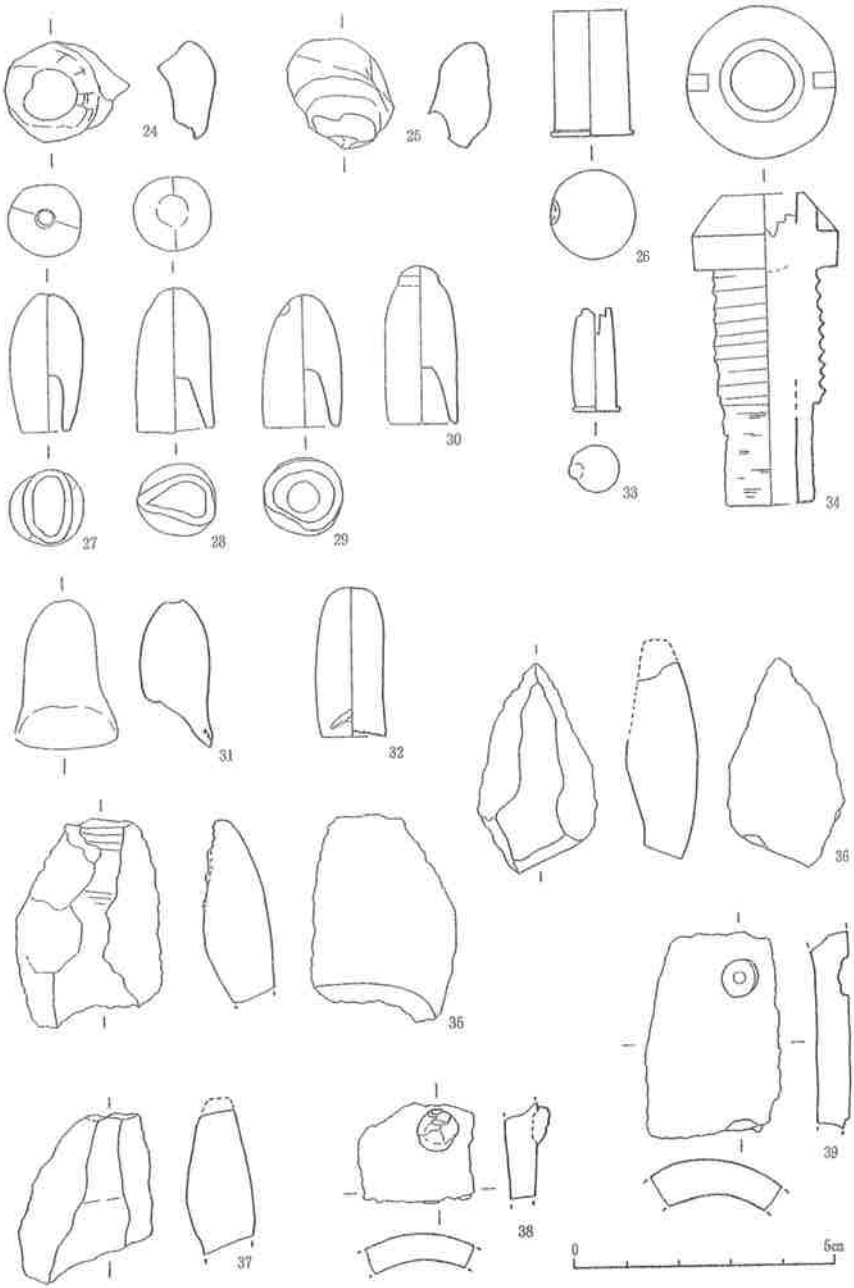
分布の特徴は台場一から台場三までの北面と、そこから北側の尾根上部、その北に続く尾根の西側斜面に帯状に散乱することである。遺物の種類は小銃弾・同薬莢、短銃薬莢、四斤砲弾破片である。小銃に関しては元込め式のスナイドル銃弾とその薬莢、七連発のスペンサー銃弾と薬莢、錫と鉛の合金銃弾・青銅製銃弾があった。短銃に関しては薬莢があった。


台場1
台場2
台場3
台場4
台場5
スナイドル銃弾
スナイドル薬莢
スペンサー薬莢
スペンサー銃弾
鉛・鉛合金銃弾
銅製銃弾
四斤砲弾
S＆W No.3
リボルバー薬莢
0
10m

台場と遺物の分布状態



椎葉山の遺物



椎葉山の遺物

文字による記録

以上、現地に残る痕跡を文字による記録を検討して解釈しておきたい。攻撃を仕掛けた政府軍側と攻撃された薩軍側の記録がある。

政府軍側の記録

陸軍の正式記録は「征西戦記稿」である。この日、一八七七（明治十）年八月六日に行われた攻撃についても記載されているが、直接担当した熊本鎮台の記録を簡略化して記述しているので、原本たる「熊本鎮台戦闘日記」の全文を掲げる。

八月六日　本営　重岡　出張参謀部　仁田原　黒澤

大原口攻撃ノ部署

左翼繁茂山

先驅　第十聯隊ノ内一中隊

援隊　第十四聯隊ノ内一中隊

豫備　第十聯隊ノ内一中隊

右指揮官少佐吉田道時

陸地村本道

先驅　第十四聯隊ノ内一中隊

援隊　第十四聯隊ノ内一中隊

右指揮官少佐青山朗

右翼大原越

先驅　第十四聯隊ノ内一中隊

警備隊ノ内一小隊

援隊　警備隊ノ内一小隊

右指揮官少佐津下弘

副指揮官大尉高田吉岳

午前第一時右ノ部署ヲ以て諸道ヨリ進撃スト雖モ前夜暴雨黒雲天ヲ蔽ヒ泥土道ニ滿チ進行大ニ遲緩セリ右翼椎葉山ノ賊壘ニ迫ラントスルニ當リ東方既ニ白ク彼ノ發見ヲ慮リ外口ヲ待ツニ遑アラス山腹ヨリ急ニ之ヲ襲フ然リト雖モ鹿柴木柵數重植立衝突ノ術ナク同第八時兵ヲ収メテ舊線ニ還ル他ノ諸道皆兵ヲ収メテ退ク我軍死傷尤モ多シ士官三名下士卒十六名即死士官二名下士卒四十三名負傷

繁茂山の場所は不明だが、陸地村本道が県境の陸地峠のことらしく、右翼が大原越なので、左翼繁茂山は陸地峠の東側に位置するのであろう。午前一時に左翼・中央・右翼同時に出発したが前夜の悪天候のため道がぬかるみ計画どおりに前進できなかった。椎葉山のそばまで来たときには夜が明けそうであり、中央・左翼が戦闘を始めるのを待っていては自分たちの存在を敵に発見される恐れがあるので山腹から急襲した。しかし、伐採した木々が帯状に連なり、木の柵も数重に廻らされており簡単に攻撃する手立てがなかったので、午前八時に撤退した云々ということである。熊本鎮台に属した部隊の死傷者については「熊本鎮台戦闘日記附録死傷之部」に氏名・所属・階級の一覧表があるので、この日の損害を見ておきたい。「同年同月六日大分縣下大野郡蛇葛山於テ戰死」は警備隊十六人、第十四聯隊第一大隊第四中隊四人、負傷者は同中十七人（うち鶴崎病院で死亡した者五人・同大阪病院一人）、警備隊二十七人（うち鵜崎病院で死亡三人・同大阪病院六人）とある。警備隊の損害は

戦死者は後日病院で死んだものを加えるとママ十五人、負傷者は十八人の合計四十三人であり、十四聯隊の倍である。

「明治十年役薩軍資料」

攻撃された薩軍側の記録を検討する。資料は五冊に分かれており、内訳は次のとおりである。第一分冊は第四大隊九番小隊の二月八日から七月三十一日までの日記で、筆者は給養担当伊地知正介ある。給養というのは今日でいう総務や庶務にあたり、金銭・武器・食料等を扱う重要な職務であった。九番小隊は二月・三月は熊本県山鹿・西合志に戦い、四月は御船から矢部、江代に後退し、第四大隊という呼称から奇兵隊に改称する。延岡を本拠に大分県に侵攻したのが野村忍介を隊長とした奇兵隊である。九番小隊は奇兵十二番中隊となる。五月十二日延岡に着いたこの日、先行していた奇兵隊の一部は大分県宇目の重岡に侵攻した。九番小隊は六月二十四日宇目の切込谷進撃に参加し、二十七日以降敗退した七月十六日までは現宮崎県北川町と大分県直川との県境尾根にある陸地峠を守備する。十六日、第三大隊三番中隊と改称している。その後、陸地峠の南西方向にあたる県境尾根である椎葉山の守備につく。

第二分冊は第一分冊と同じ隊（三番中隊と改称したが）の名簿である。

第三分冊は第一分冊と同じ隊の四月二十四日までの日記である。記述の特徴は別物であり、伊地知とは別人が書いたらしい。

第四分冊は三番中隊の八月一日から十四日までの日記である。引き続き三番中隊は椎葉山の守備を受け持ち、日々の天候・暗号・本営からの通知文・兵員の異動・出来事・死傷者・埋葬・戦場で回収した使用済み弾丸や薬莢の数等を記録している。

椎葉山が位置するのは大分・宮崎県境の尾根線である。ＪＲ日豊本線の大分県最南端の駅、宗太郎駅とその北の重岡駅との間、線路は一直線に南北に走る県境尾根の西側の麓を通過している。両駅の中間あたりで東側を見上げると椎葉山が木々や手前の尾根に隠れて見えないがそれらの向こうに存在するはずである。

西南戦争当時、政府軍は薩軍を一旦は県外に追い出し、県境一帯に防御線を敷いていた。六月二十四日、佐伯市宇目の赤松

谷・切込谷一帯を県境を越えて薩軍が襲ってきた。中津隊もその中にいた。政府軍はなんとか撃退することができたが、この日双方それぞれ百人程度の死傷者が出たようである。翌二十五日、今度は前日の戦域から十キロ東北による陸地峠の県境守備線が襲われ、政府軍は敗走した。陸地峠はこの日から薩軍が占拠し続けていたが、七月十六日の政府軍の攻撃により陥落した。

「明治十年役薩軍資料」を残した部隊も陸地峠一帯の配置についていたが、退却した。以下、これを引用する。

七月十七日　雨

一本日矢ケ内峠台場気付方として縄俵手当致差送り、給養村原貞利・岩川勇八郎・寄橋元蔵候、（以下略）

この日記によれば、十七日に矢ケ内台場を築くため縄・俵を送り込んでおり、少なくともこの日から彼らは守備を始めている。矢ケ内というのは宮崎県北川町の地名である。蒲江・佐伯・直川・宇目南東部に接する宮崎県側の県境地帯を流れる川が集まる場所に位置する。したがって矢ケ内本営が命令を下していたのはこれらの流域に広がっていた奇兵各隊であり、この日記を残した三番中隊だけではない。この時期の奇兵隊の配置状況をピラミッドに例えれば、県境尾根の台場群が最下層で、その上に台場付近の集落に設けた休憩所があったり、台場に近い場合は直接矢ケ内集落の本営があり、その上に熊田（国道十号と国道三二六号の合流する場所にある。北川と鐙川の合流点でもある。北川を遡れば八戸・下赤・上赤の各集落があり、古代以来の官道が通る梓峠への順路でもある。今は鐙川に沿って国道十号やＪＲ日豊線が通っているし、当時は明治六年から赤松谷を経て重岡へ至るのが大分・鹿児島間の公式路線であった。）本営があり、頂上に延岡の奇兵隊本部があってここには弾薬・大砲製造所や銃器修理所もあった。戦場で回収した使用済み弾丸・薬莢、分捕った未使用の実包、故障した銃は最終的にここに集められた。

矢ケ内台場というのは後からも出てくるが、矢ケ内集落に近い県境の尾根及び峰にある台場群のことだろう。八月六日に政府軍が攻撃した椎葉山がそれに含まれるようだ。ただし薩軍は椎葉山とは呼んでいない。「薩南血涙史」は蛇葛山としている。椎葉山の名は政府軍の記録「征西戦記稿」巻五十八　豊後口三田井戦記に一個所出てくるだけである。七月十七日から三番中

隊は椎葉山守備を担当することになった。

七月廿一日　晴天

（中略）

今より分捕品有之節ハ銃器・弾薬ヨリ雑品ニ至る迄、精密其都度御申越有之度、且手負・戦死之向ハ向後尚又別て委敷取調之上、是又名簿御差回し相成度候様有之度候也、

熊田在陣

七月廿一日　　奇兵本営印

尚々是又御差回し相成候敵兵、今後戦毎ニ其戦状之顛末モ精細御記送被下度、今より戦状日記モ取立候筈ニ候也、別紙之通申来候間及回章候也、

七月廿一日　　矢ケ内

奇兵本営印

旧十二番中隊

其外略ス

金属不足に悩まされ続けた薩軍は漁網の錘、民家の錫鍋、寺院の梵鐘、神社の銅葺き屋根など悉く集めて銃弾や大砲の材料としていたので、戦闘直後の戦場で廃品回収を熱心に行ったことがこの日記の各所に登場する。

七月廿一日　晩

一旋条銃弾薬四箱（高橋註－以下同じ－銃身にライフル溝を刻んだ銃用の弾丸。通常一箱は五〇〇発入り）

一雷管弐千（先込め銃の場合、激発は銃身基部から上部に細い管が突き出ており、これに叩くと火花を発する火薬を少し

右弐行夫ケ内本営ヨリ相請取候、（詰めた麦藁帽子状の青銅製の蓋＝雷管＝を被せる。ミニエー銃用の弾丸と雷管である）

一針打銃弾薬一箱

但四百発入

右壱行旧四番隊ヨリカリ入候、尤追々現玉請取之上返済之約束なり、

一旋条銃弾薬五箱

但五百発入

一針打銃弾薬壱箱

但四百発入

右弐行差送候也、

原　重次　荒木代四郎　久保松藏

岩下　求　財津啄次郎　上野政吉

平山文蔵　黒木末太郎　税田祀禮

森忠五郎

右十名鎌攘隊ヨリ右小隊へ入隊、

百人ほどの三番中隊にミニエー銃用の弾丸二千発だから、一人二十発である。これ以前に受け取ったのは七月十日にミニエール弾薬と雷管各千発・針打弾薬三百五十発だがこれは陸地峠で七月十六日に使い切った筈である。十日ぶりに供給されたものの政府軍兵士が一日につき百発受け取っていたのと大違いである。薩軍は七月三日に北川流域の梓山から水ケ谷・黒土峠の政府軍を追い出して占拠していたが、二十三日にはそれらと椎葉山との中間にあたる尾根を通って赤松峠を攻撃した。三番中隊も葛葉から切込谷まで応援に出かけたが、戦闘には参加しなかった。

七月二十六日の日記の一部を次に掲げる。

一本日蝋燭拾丁
右番兵先右小隊詰へ差送候事、
一鉄製弾弐百弐拾発
右ハ番兵先為探打左右小隊ェ差送リ候事、

初めて鉄製銃弾が送られて来た。鉄製銃弾二百二十発を左右小隊すなわち三番中隊全員分として配給したのである。番兵先為探打とわざわざ書いている。本来ならば銃弾は十分な重さがあって飛距離のある鉛製が望まれるが、薩軍では早くから鉛が不足しており錫との合金弾丸や青銅製弾丸を用いていた。最終的には鉄製弾丸を作るようになった。鉄は軽くて遠くに飛ばず、硬いため銃身内の旋条に密着せず照準が定まらない粗悪な弾丸だったが、七月初めには奇兵隊のみならず南九州各地の薩軍も作っていた。七月二十七日の記事にも銃弾のことが出てくる。

一鉄製弾三百三十発
一雷管三百三十粒
右右小隊番兵先守場へ差遣候事、
一鉄製弾百七十発
一雷管百七十発
右ハ左小隊右半隊守場ェ差遣候事、

翌二十七日に配給したのも鉄製銃弾である。右小隊は二日間で五百五十発の鉄製銃弾を受け取った。その後、八月六日に政府軍による攻撃がある。

八月六日　雨

本日午前七時比ヨリ、我隊守兵場右小隊壱番・弐番・三番分隊之間ェ敵ヨリ相掛、則戦争及候処シハラク相戦、台場之間五六間モ敵ヨリ寄来候処、味方ヨリ切込ニ相掛敵ヲ打ちらし、其内第一大隊一番中隊ヨリ応ゑんトシテ来リ仕合ニテ、トモニ切込ミ賊死骸弐拾名余内三名師官等相見得、一ノ一中隊長と師官切合敵師官ヲ切コロシ、一ノ中隊長手負ニテ我隊分捕数多有之、左ノ通ニテ候間午前十一時過敵打ちらし、我隊右之守兵台場ェ引揚大勝利ニテ仕合御座候也、

本夜暗号

問　辨カ、　答　慶、

右之通決議候事、

矢ケ内出張

奇兵

本営

八月六日

第三大隊

三番中隊

各隊隊長中

記

一賊死骸弐拾名余

一手旗三本

一七連玉千発余（七連発のアメリカ製スペンサー銃の弾丸）

一針打弾薬千発（金属薬莢の実包で、おそらくイギリス製スナイドル銃用か）

一時計弐ッ
一刀四本
一針打銃四挺　（おそらくスナイドル銃）
一長七連銃拾挺（スペンサー銃）
一腰具拾ヲ　（実包入れを十個か）
一短銃壱挺　（調査ではアメリカ製スミス・アンド・ウエッソンNo.3リボルバーに使える薬莢が出土した。―薬莢の
但中折弾薬相添　鑑定は磯村照明氏による―）
一外套二着三着（暫壕―トレンチ―で着るのでトレンチコート）
一喇叭壱ッ
一手帳并書状無数（軍隊手帳と手紙や日記類か）
一烟草入四ッ五ッ
但金具金銀
右本日矢ケ内守兵場戦争ニテ分捕、右之通候ニ付則当所本営ェ戦死手負一所ニ届申出置候事、
手負戦死左之通
分隊長　（第二分冊の「明治十年丑七月改之左右小隊名簿奇兵第三大隊三番中隊」より下に付記）
深手　大浦重樹　（左小隊分隊長）
軍曹
薄手　吉瀬荘一　（三番分隊）
右同

深手　日高敬介　（一番分隊）

伍長

薄手　肥後重愼　（二番分隊）

右同

深手　初野猶一　（二番分隊）

兵士

薄手　圖師源左衛門　（三番分隊）

右同

右同　柳田今之丞　（三番分隊）

薄手　橋元憲藏　（二番分隊）

隊付夫卒

深手　丸田袈裟次郎　（不明）

右九名手負

軍曹今泉士族

戦死　大平熊太郎　（四番分隊）

銅壱錢トル壱枚揃金

兵士櫻島士族

戦死　上山平藏　（二番分隊）

金三円五十錢ト古壱分銀壱切レト亦金トル十枚、守兵場ニテ手負歟、

右本日矢ケ内本営エ届申出置候事、

八月六日

一針打弾薬弐百四拾発

右延岡奇兵製作所ヨリ送リ来リ、午後七時拾五分前相届キ、正ニ相受取候事、

一主取夫太郎儀、本日午後五時比延岡ヨリ買物トシテ婦宿候事、

一岩切助右衛門事、戦死才領トシテ熊田迄差越候事、

第三大隊三番中隊

左分隊長代理

小濱喜之助（略）

八月六日、政府軍が奇兵三番中隊右小隊一・二・三番分隊の持場を襲った。右小隊は四番分隊まであるし、一人戦死している。四番分隊は攻撃されなかった付近の持場にいたのか。四番分隊は椎葉山の南側台場にいて、第一中隊はそれに続く南側を守備していたのだろうか。文中、応援に駆けつけたのが第一中隊であることを考えると、この日左小隊は宿陣で休息していたらしい。但し左小隊では分隊長が一人負傷しており少なくとも彼は駆けつけた、と解釈できる。

表　奇兵第三大隊三番中隊左右小隊名簿

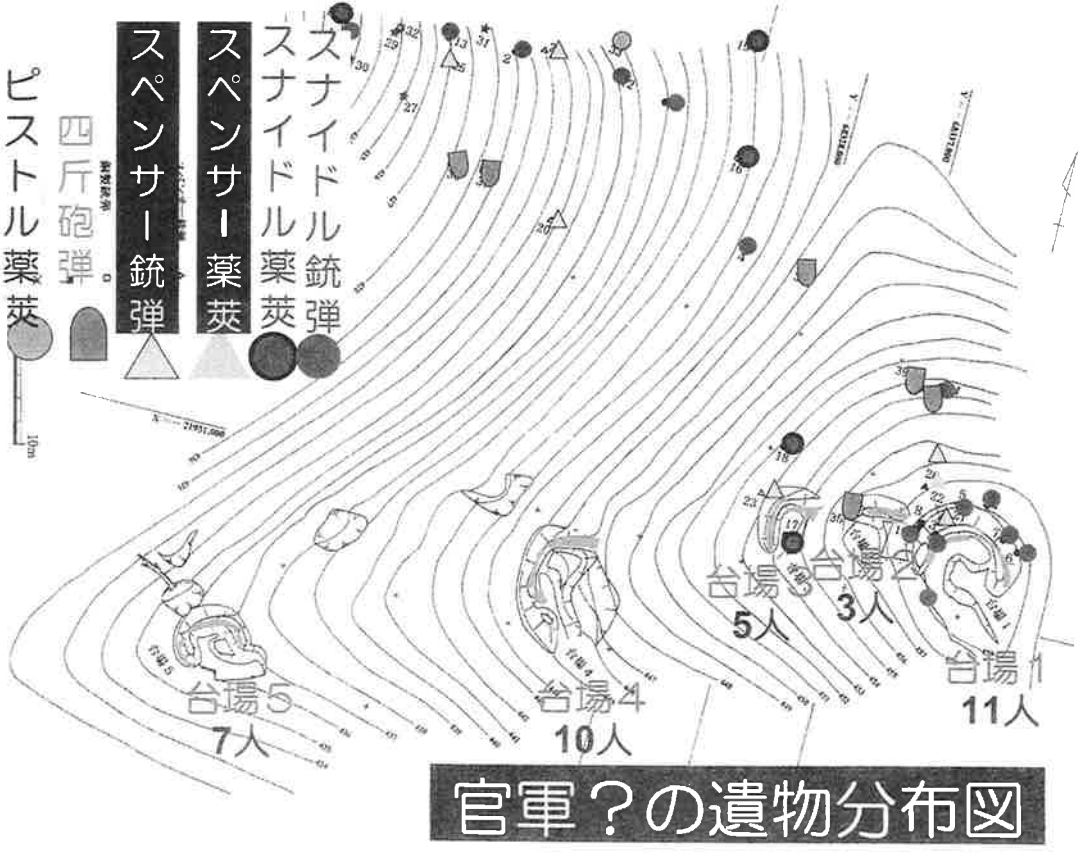
	人数	8月6日		備　　考
		負傷	戦死	
右小隊壱番分隊一	6人	1		右小隊長は松崎覺二
壱番分隊二	3人			
弐番分隊一	7人	2	1	
弐番分隊二	7人	1		
三番分隊一	8人	1		1人は7/29延岡へ入隊
三番分隊二	5人	2		
四番分隊一	5人		1	
四番分隊二	5人			
右小隊の三官・喇叭・軍曹・伍長・兵士の計50人／夫卒7人／小計57人 三官とは幹部のこと。				
左小隊壱番分隊一	6人			左小隊長は岩切正九郎
壱番分隊二	6人			
弐番分隊一	5人			8/4に1人負傷
弐番分隊二	7人			
三番分隊一	5人			1人は7/27延岡大隊へ帰隊
三番分隊二	7人			
四番分隊一	6人			
四番分隊二	4人			
左小隊の三官・喇叭・軍曹・伍長・兵士の計49人／夫卒7人／小計56人				
三番中隊には、他に給養軍曹3人・給養伍長3人・給養夫卒12人・雇夫32人がいた。給養とは補給・輸送などを担当した。				

戦闘直後、薩軍は分捕品を戦死・負傷者名簿と一緒に矢ケ内本営に届け出ている。内容はスペンサー銃十挺・おそらくスナイドル銃であろう銃を四挺・スミス・アンド・ウェッソンNo.3リボルバー短銃（発見した薬莢一点を磯村照明氏―JAPAN CARTRIDGE COLLECTER'S ASSOCIASION―に鑑定していただいた）一挺の銃器とスペンサーママ実包千発余り・スナイドル銃実包千発その他である。短銃は戦死した士官（警備隊大尉高田吉岳・第十四聯隊第一大隊第四中隊少尉試補今村　鹿・同軍曹佐藤兼言）の誰かが所持していたのであろう。昨年、同じ短銃が熊本鎮台のあった熊本城跡の発掘調査でも出土している。当時政府軍全体では数百挺の短銃を所有していた。戦闘後の夕方、七時十五分に延岡製作所からスナイドル銃用であろう実包二百四十発が送られてきた。前線から使用済み薬莢や銃弾が製作所に持ち込まれるわけだから、鉄製弾丸だけでなく通常の実包も少しは製作可能だったのである。

戦闘の復元

遺物の分布状態をここで検討してみる。スナイドル銃弾は台場五の北側下方の谷から台場一に向かって帯状に分布するとともに台場一土塁部の外面に特に集中していた。同銃の薬莢は帯状分布の尾根に近い部分に二点、台場三の内部に一点である。スペンサー銃弾も台場一土塁部の外面に三点（一点は前回採集）、台場三の北西部に一点、帯状分布域に二点みられ、薬莢は台場一の北西部に一点である。調査範囲を広げればもっと外側に発見されたであろう。四斤砲弾片は谷の中と台場一の北側斜面、台場二の土塁部に埋まっていた。短銃の薬莢一点が台場一の北側下方にあった。明らかに薩軍が発射したと考えられるのは、錫と鉛の合金製ミニエー銃弾と青銅製銃弾である。これらは台場群から四十m以上離れた谷の下方一帯にまとまって分布した。ちょうど調査範囲の境界付近に集中していた。

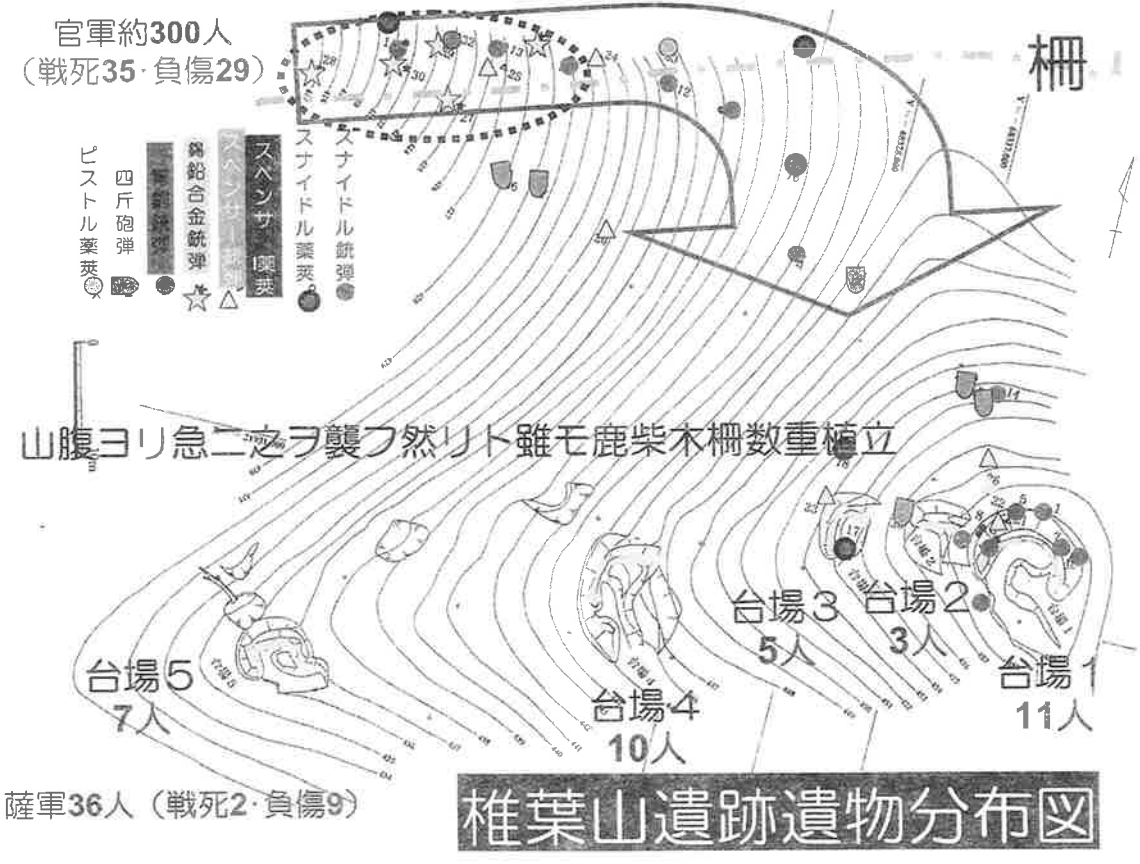
政府軍側の記録では山腹ヨリ急ニ之ヲ襲フ然リト雖ヒ鹿柴木柵數重植立衝突ノ術ナクとある。尾根線ではなく山腹から襲撃したというのは銃弾、薬莢の分布と一致する。薩軍の放った銃弾が台場群のある尾根から四十m以上離れた斜面の途中に集中


スナイドル銃弾
スナイドル薬莢
スペンサー薬莢
スペンサー銃弾
四斤砲弾
ピストル薬莢
10m
台場5
7人
台場4
10人
台場3
5人
台場2
3人
台場1
11人

官軍？の遺物分布図

図4

薩軍の台場と遺物の分布



椎葉山遺跡遺物分布図

図十

するのは、この付近に木柵があって政府軍が速やかに前進できないところを薩軍が上から射撃した証拠であろう。鹿柴木柵とあるので、当然前面一帯を伐採した木々を帯状に並べて木柵と組み合わせていたのであろう。木柵は谷の下から尾根上を通って反対側の斜面に設けられ、しかも一列ではなく数列あっただろう。これは薩軍だけでなく、政府軍側も通常行っていた方法である。北側斜面に分布した砲弾片は政府軍が現場に大砲を持ち込んだ結果ではなかろう。四斤砲は射程が三千m程度あったので、県境尾根のうち椎葉山に続く北方の何処かから発射したのだろう。椎葉山の調査を終えた後、北側尾根線を歩いて調べたところ、椎葉山から約一キロ離れた場所から北側の尾根線上に約二十五の台場を確認した。それらの南部の方には星型の六稜台場一個をはじめとした多稜台場が数個ある。このような多稜の陣地は小銃ではなく大砲の発達に伴い考え出されたものであり、ここに大砲を置いたのではないかと思う。

戦闘当日と次の日、戦場跡で廃品回収を行ったことが日記からわかる。

八月七日　雨

一針打弾薬カラ四千五拾発（スナイドル銃薬莢四千五十発）

一七連右同千弐百六拾発　（スペンサー銃薬莢千二百六十発）

一損シ鉛玉七拾　（使用済み鉛製銃弾か）

右三行延岡製作所ェ差送り候事、

本夜暗号、

問　船カ、　答　嵐、

右之通決議候事、

矢ケ内出張

八月七日　　奇兵本営

各隊隊長中

一山刀壱本

右矢ヶ内出張本営ヨリ伊地知相受取候也、

手負　栗山良七

右同　黒江吉之丞　（二番分隊）

人手負　伊東彦右衛門　（二番分隊）

右同　橋元英助

右同　木場源左衛門

右同　大山十介

右同　岩下傳之丞

右七名帰隊相成候事、

軍曹　大平熊太郎　（四番分隊）

兵士

上山平藏

右両名一昨矢ヶ内台場ニて戦死いたし、本日午前十一時過くま田才領として岩切助右衛門差越、夕五時過熊田ノ内吉祥寺ェ葬埋す、今日午後八時比帰陣いたし候、遺髪等熊田奇兵大小荷駄田村甚藏ェ相渡置候、

八月六日の戦闘に関する記述は以上である。戦闘当日は銃と実包等の分捕り品を矢ヶ内本営に届け出、翌日は使用済み薬莢、スナイドルとスペンサーの発射済み弾丸を延岡製作所に送っている。両日の表現に相違が見られるので、当日の届出というのは単に紙上の通知であり、現物は手元に残した、とも解釈できる。この時の戦死者を葬った吉祥寺は八月十二日に西郷隆盛が

一泊した寺である。他の記録でも戦死者は可能な場合は後方に運ばれ金を払って埋葬してもらったり、墓石・墓標をたてたらしい。

スナイドル銃とスペンサー銃は一般的には政府軍の装備と考えられる。しかし、薩軍にとってはどこかの戦闘で政府軍から分捕った武器も重要な自分たちの装備であった。椎葉山で発見したそれらの中にも政府軍ではなく、薩軍が発射したものがあったとみられる。戦闘があった日より前の七月二十一日の日記に出てくる針打銃弾薬壱箱（四百発入り）はスナイドル銃・スペンサー銃のものの可能性がある。一方、同時に先込め銃用の旋条銃銃弾四箱（二千発）・雷管（二千個）も装備していた。

薩軍の椎葉山守備はその後どうなったのだろうか。「明治十年役薩軍資料」からみておきたい。八月十一日の日記を彼らの日常を示すものとして全文掲載する。

八月十一日　半晴

一雷管五百粒

右矢ケ内出張奇兵本営ヨリ正ニ受取候事、

回章

本夜暗号

問　権乎、　答　三、

右之通決議候事、

矢ケ内出張

八月十一日

本営印

第三ノ三番中隊

其外略ス

喩章

各隊台場築等、尓来鍬并山鍬等該台場ェ留置候ケ所も有之由、就テハ非常急遽ノ辰ニ至リ不都合不尠、且邨落之者農務ニモ差支候条体任シ、平素ハ悉皆返下シ必用ノ都度取出シ、現業施行候様有之度、此旨諭告候事、

矢ケ内出張

明治十年八月十日　本営印

各隊々長中

同給養中

伊地知正助

右諸用向ニ付今日延岡之様差越候、

渡邊浅治

右朝飯後右小隊番兵先詰岩川勇八郎ェ交代として出張いたし候、

一金弐拾六円

右壱行昨日松崎覺二・久留十郎・長井喜之進立合ノ上金五拾九円村原貞利ヘ相渡候金之内、本行通本夕久留十郎・池田幸吉・小濱喜之助見分立合之上、村原貞利ヨリ岩河勇八郎ェ正ニ相渡候也、

給養方并隊付之外夫雇夫事、何名ノ訳御取しらへ、大至急給養軍曹之内壱名御出頭可給候也、

矢ケ内出張

八月十一日　本営印

第三ノ三番中隊

共外略ス

回章

奇兵病院出張所松場ェ相設候条、向後病人診察ハ医員相掛リ候様可有之、自由ニ松瀬医員ェ診察ヲ受候者モ有之哉之趣、向後右様之義無之様可有之候也、

矢ヶ内出張

奇兵

八月十一日　本営印

各隊給養中

回章

延岡表ヨリ遅之次第有之候条、各隊給養并定例隊ニ付夫卒人員明朝迄御書出可給候、尚明日ハ松葉出張奇兵医員各隊給養所并旅人宿陣之廻診相成候条併て及御報候也、

矢ヶ内出張

奇兵

八月十一日　本営印

第三ノ三番中隊

外隊略

旧十弐番

兵士

西木場直次郎

櫨山十介

右両名今般帰隊ニ付着之上可然御取計給度候也、

熊田在陣

奇兵

八月十一日　本営印

矢ケ内

奇兵

本営御中

奇兵旧十弐番

中隊兵士

朝日純治

篠原才藏

圖師源左衛門

右ノ面々帰隊ニ付本日当所差立候間、着ノ上ハ可然取計給候也、

熊田在陣

奇兵

八月十一日　本営印

矢ケ内出張

奇兵

本営御中

一針打銃弾薬四百発

右本日奇兵製造課宅万伴助ヨリ伊地知正介当事ニて手紙相添、熊田之方ヨリ差送リニ相成、正二相請候也、

再度の政府軍の攻撃を当然想定したであろう。台場を修築し、戦傷の発生に備えて診療所を近くに設けたりしている。台場構築に使う鍬の取扱いに付いての件、松葉に病院出張所ができ医員が台場の宿等を回診することになった件、兵士の復帰等日々の雑事を細かく記録しており日常生活の内容を推測することができる。四百発の実包は政府軍なら四人分である。

八月十四日

（略）

大至急本営ヨリ出頭いたし候様有之罷出候処、熊田之様静談ニ矢ケ内峠守備引揚候様、大隊長ヨリ達相成、直様引揚之要用候事、

一針打玉薬百九拾発

一ミニエール

日記第四冊はここで突然終わる。最後に記された弾丸は延岡から送られてきたものであろう。日記を記し続ける余裕もなく出発したのだろうか。大至急矢ケ内の守備を引揚げ政府軍に気づかれぬよう静かに熊田に来るように薩軍本営からの命令が来たのである。当時薩軍本営は五万人とも六万人ともいわれる政府軍に追われ延岡を出て、北方の熊田付近に閉じ込められようとしていた。この形勢を逆転できる望みは薄かったが、最儀の決戦を十五日に熊田と延岡の中間に横たわる長尾山・和田越・小梓山一帯の丘陵で行おうとしていた。この時の残存兵数は二千人弱程度と推定されている。大分との県境地帯に分散している奇兵隊は二千人位はいたと思われ、彼等を呼び戻すこととなったのである。しかし、全員が集まるには時間的に無理があった。西方の梓山、中間の矢ケ内にいた奇兵隊は決戦に間に合ったようだが、東方の北浦に散っていた奇兵隊が熊田に着いたの

は和田越周辺での決戦が終わった後だった。

椎葉山の調査は時間的な問題で小範囲にとどまったが、予想以上の成果だったと思う。しかし、戦跡の範囲という意味では単に台場の跡がある場所だけでなく、遺物が分布し戦闘の痕跡を残す範囲も戦跡範囲に含め、当初からもっと広く調査範囲に加えておくべきだったと反省している。その点では椎葉山では戦跡の中心部分だけを調査したことになる。

＜引用・参考文献＞

高橋信武「蛇葛山に行く」『西南戦争之記録』第二号　西南戦争を記録する会二〇〇三

「大分県内遺跡発掘調査概報告八」大分県埋蔵文化財センター二〇〇五

「明治十年役薩軍資料」『鹿児島県史料　西南戦争第三巻』一九八〇

「征西戦記稿」陸軍参謀本部（一九八七年青潮社の復刻版による）

「熊本鎮台戦闘日記」一八八二陸軍参謀本部

（大分市猪野八一三の三在住）